別紙様式5

令和4年度　　学 校 評 価 表　　（ 中間評価 ・ 最終評価 ）　　東広島市立龍王小学校

学校教育目標	夢と志をもち，未来を切り拓く子どもの育成	経営理念	学校内外の教育環境を最大限に活用し，次世代を担う人づくりを行うとともに，地域とともに発展する学校を創る。

評価計画							自己評価					学校関係者評価		改善方策
項目	重点	中期経営目標	短期経営目標	目標達成のための方策	評価項目	目標値	達成値 10月	達成値 月	達成度	評価	結果と課題の分析	評価	コメント	改善方策
確かな学力の向上	1	自ら学ぶ子どもの育成	情報活用能力の育成	情報活用能力の育成に係る実践研究	・児童アンケート	肯定的評価：85%以上	92%		100	3	児童アンケートによると，解決したい課題に対して「なぜだろう」「知りたい」と思うと答えた児童が92%，学習の終わりに「もっと考えてみたい，調べてみたい」ことがあり，自分から進んで学習に取り組んでいると答えた児童が87%だった。概ね主体的に学習に取り組もうとしている児童が多いが，「ほとんど，まったくできていない」と答えた児童も10%程度いる。	A	主体的に学習に取り組もうとするについて「ほとんど，まったくできない」と答えた児童に対して，今後どのように改善するかを考えていく必要がある。	授業研究を中心に，ICTの効果的な活用による思考力・表現力を高めるとともに，主体的に学習に取り組む授業の改善に取り組む。また，もっと調べてみたい，次にやってみたいことを増やしていくために，振り返りを観点表に基づいて行う。
			基礎学力の定着	個別プリント・タブレットドリル学習の推進	・業者テスト国語（知識・理解） ・業者テスト算数（知識・理解）	80点以上の児童80%	国84% 算88%		107	4	全学年で単元末テストの知識・技能が80点以上は国語84%，算数88%で目標を達成した。しかし，各クラスや学年間で差が大きく，基礎的な部分（国語では漢字の書きや言葉の習得，算数では計算）で課題がある児童もいる。	A	児童が一生懸命に学習に取り組んでいる。 ICT機器を使って電子黒板をうまく利用することができている。	計画的に継続して，課題につなげる朝学習を実施して基礎学力の定着を図る。また，基礎学力が身に付きにくい児童に対しては，個に応じたプリントを準備する等，指導の工夫を行う。
豊かな心の育成	2	思いやりのある子どもの育成	あいさつの定着	児童会，PTA，地域との連携・協力	・児童アンケート ・保護者アンケート	肯定的評価：80%以上	児童 低80% 高91.7% 保護者57.6%		88	2	児童アンケート「相手に伝わるあいさつができていますか」に対して肯定的評価をした児童の割合が低学年が84.5%，高学年が89.7%であった。「登下校時，地域の人にあいさつしていますか」に対しては，低学年が80%，高学年が91.7%であった。 一方，保護者アンケート「本校の子どもたちは，あいさつや返事ができている」に対して肯定的評価は57.6%であった。児童と保護者の評価にギャップが生じている。 子どもたちは，あいさつをしているつもりではあるが，相手に伝わるあいさつができていないことが考えられる。	B	気持ちの良いあいさつとはどのようなものかを繰り返し指導していく必要があるのではないか。 「あいさつボックス」等，色々な活動を子どもたちが考えて行っているため，広く周知するとよい。	これまで，計画に終わっていたあいさつ運動の取組を実践していくことで，気持ちの良いあいさつの定着を図る。また，その取組を保護者・地域に発信していくことで，保護者の意識も高める。
			支持的風土の醸成	・異年齢集団活動の推進 ・児童会活動の充実	・保護者アンケート ・児童アンケート	肯定的評価：95%以上	児童 低92.6% 高96.8% 保護者94.7%		94.7	3	児童アンケート「友達の気持ちを考えて行動していますか」に対して肯定的評価をした児童の割合が低学年が92.6%，高学年が96.8%であった。また，保護者アンケート「自分の子どもは，思いやりのある優しい心が育っている」に対して肯定的評価は94.7%であった。 ただ，どの学年においても，友達に対して傷つくような言葉を投げかけたり，相手を大切にしない行動をしたりしてトラブルになることもある。	B	「思いやりあいさつボックス」をとおして，人の温かみに触れられるような空間があると思いやりの心に直結する。	異学年集団活動の中で，相手を思いやる行動がとれるような取組を仕組む。 児童会活動では，一人一人の頑張りが認められるような評価の在り方を児童に考えさせる。
健やかな身体の育成	3	自ら安全や体力向上意識して生活できる子どもの育成	食育の充実	食育指導の充実	・残菜率 （東広島学校給食センター内）	3．5%以下	4.5% （7月）		77	2	4月5月は6%代であった残菜率が7月には4.5%まで減少していた。7月は給食委員会が完食キャンペーンを行ったこともあり，減少傾向にあったが，学年やクラスによっても残菜率に差が見られるため，実態に応じた目標設定を行い，定期的に完食キャンペーンを行っていく。	B	給食は「日頃家庭で食べている量」から一人一人の食べる量を決めて完食できるようにするといいのではないか。	給食では，自分で食べられる量を決めるなど，一人一人が完食に向けて取り組めるように仕組む。 完食キャンペーンを定期的に行い，個人で達成可能な目標を設定させ，意欲が高まるような取り組みにしていく。
			体力の向上	・外遊びの励行 ・固定遊具等を活用した体育授業の工夫	・新体力テスト課題種目（50M走，握力，ソフトボール投げ）結果	前年度値以上	53%		53	1	50M走では，男子4年生と女子4・6年生，握力では，男子5年生と女子2・3・5・6年生，ソフトボール投げでは，男子2・3・5年生と女子1～4・6年生が前年度を下回っていた。課題種目以外にも，多くの項目で前年度を下回っていた。	B	サーキットの内容については，みんなができるものにしていく必要がある。	龍王サーキットは，児童が継続して主体的に取り組めるように，強化月間を定めるなど，変化を持たせながら進めていく。 外遊びや運動機会を楽しく増やせるように，スポーツ委員会主催の取組を児童に考えさせる。
働き方改革の推進	4	業務改善の推進	児童と向き合う時間の確保	・学校行事等の精選 ・教科担任制の推進 ・学校運営協議会とPTAとの連携による開かれた学校づくり	・教職員アンケート	肯定的評価：80%以上	51.1%		63	1	会議の開催時間の明確化を図り，会議の統合化を行った。高学年における教科担任制の推進により適切な時間管理が行えるようになっている。	B	教科担任制の推進とともに，地域の方を授業の中で生かす取組を行うことによって，地域を学ぶきっかけになるのではないか。	PTAボランティアのシステムが整いつつあるため，今後活用していくことにより開かれた学校づくりにつなげる。

※目標の精選と重点化を行い、重点の項に「1」「2」「3」で表示する。

■自己評価
4…目標を上回って達成　3…目標どおりに達成
2…目標をやや下回って達成　1…目標をかなり下回って達成

■学校関係者評価
A…とても適切である　B…概ね適切である
C…あまり適切でない　D…全く適切でない
（N…判定できない）